1　チーム名（研究対象領域・教科） **小学部　日常生活の指導**	
2　メンバー	小学部教員３名
3　チームのテーマ **自立へ向け、基本的な生活習慣の向上をめざした支援の工夫**	
4　対象児童に願う主体的な姿 **毎日繰り返される日常生活の動作が習慣化され、自ら行動することができる。**	

5　研究実践の内容

○はじめに・・・対象児　小学部４学年　女子　A（通常学級）

自立心が強く、周りにお世話を焼かれることを嫌う。社会性は高く、人形を使って「ごっこ遊び」をすることを好む。低学年の時は場面緘黙があり、話し言葉が少なかった。空間認知が苦手で、図形を模写したり、動作を真似たりすることが苦手。

○研究実践の内容・・・蝶々結び

○選んだ理由・・・作業用のエプロンに紐がついており、使用するときに「先生結んでください。」と言ってくるようになった。自分の髪の毛を、手元が見えなくても、自分でゴムで結ぶことができる。以上のことから、蝶々結びを指導するのにちょうど良い段階にあり、蝶々結びをできるようになることで、今後、衣服や靴、その他、生活のあらゆる場面で活用でき、自立につながると考えた。

○使用した教材・教具と手だて

①机上用の紐結び教材（図１）

図１

・結び方の構造が視覚的に分かるように、右手に持つ紐を赤色、左手に持つ方を青色に色分けした。
・手指の巧緻性が低くても取り扱いやすいように、形状を保ちやすい帯状の固い紐を使用した。
・机上で練習できるようになっており、帯状の紐で結ぶことができるようになったら、細い紐に変えて難易度を上げることができる。
・「バッテン」「クルリン」「ペッキン」「ギュー」等と、結び方の手順をイメージしやすいような、分かりやすい擬音語で言葉かけをする。
・できたことを認め、大いに称賛するようにする。

②紐を取り付けたエプロン（図２）

図２

・毎日使用する給食用のエプロンに、①の教材と同じステップで紐を取り付け、できるようになったら難易度を上げていく。（帯状の紐から細い紐へ）
・細い紐で結べるようになったら、紐の色を一色にする。
・最後に引っ張る部分が分かるように、目印をつける。
・できるようになったら、手元を見なくてもできるように練習を重ねる。
・できたことを認め、大いに称賛するようにする。

③背面で紐を結ぶ教材（図３）

図３

・椅子に座った状態で後ろで紐を結ぶ。
・前で結ぶのと同じ動作で、手を添えて一緒に結ぶよう支援する。
・手順が分かってきたら、少しずつ支援を減らすようにする。
・見えなくてもイメージできるように、「バッテン」「クルリン」「ペッキン」「ギュー」等と、結び方の手順をイメージしやすいような、分かりやすい擬音語で言葉かけをする。

６　成果と課題

・帯状の固い紐を使用したことで、導入の時に紐の扱いがしやすかった。また、赤と青の２色の紐を使用したことで、結ぶ時の交差する部分がよく分かった。以上のことから、早い段階で帯状の紐の蝶々結びをマスターすることができた。

・②のエプロンであれば、同色の細い紐でも、支援無しで結ぶことができるようになった。
（現在はさらに習熟度を上げるために練習中で、まだ手元を見ないとできない段階）

・紐結びができるようになったことで、自信を持ち、集団学習の場面でも積極的に発言するようになった。

・体の使い方のコツを掴み易くなり、体育の準備体操やダンスの振り等、うまく体を動かせるようになった。

・難しいことに挑戦したことで、苦手な課題にも取り組んでみようとする姿勢が育っている。

・できる喜びを感じ、主体性、積極性、向上心が芽生えた。

７　まとめ

・一人一人の児童生徒は、各家庭における生活習慣が違うことを含め、一人一人、個に応じた指導を展開しなければならない。

・家庭と連絡を密に取り、指導内容や方法について共通理解を図り、一貫した指導を行う。

・適切な支援、適切なタイミング、適切な支援の量を心がける。

最後に・・・

　児童生徒は、集団によっても成長し、集団は個人によってつくられていくことを考えた時に、日常生活の指導は、個人を形成する上で重要な要素を担っていると考える。

　日常生活の指導に関わらず、指導において、支援、工夫、言葉かけ等の、量やタイミング、それ自体すべてがある意味「教材」であると思う。教材研究と言うと、教材・教具を使いこなそうとする余り、児童生徒の本来のねらいから逸れていってしまうことも考えられる。その児童生徒の『今現在』の実態に合わせ、教材・教具の工夫や言葉かけをその都度配慮しながら、臨機応変に対応していくことが大切なのではないかと感じた。